

# 松下道信著 『宋金元道教内丹思想研究』

吾 妻 重 一

本書は中國近世道教思想を研究してこられた松下氏の  
 勞作で、修士論文および博士論文を中心に近年の論考を  
 加えてまとめられたものである。評者はこのような大作  
 を書評するのに適任とは思われないが、かつてこの分野  
 でいくらか論文を發表したこともあるので、以下、内容  
 を紹介するとともに少しコメントを加えさせていただく  
 こととする。

まず通例に従い、目次によって内容を示せば次のとお  
 りである。

I 宋・金・元代の内丹道および全眞教における性命説

序章 「新道教」再考——全眞教研究の枠組みに  
 ついての再検討

第一篇 宋代の内丹道における性命説とその諸相

第一章 全眞教南宗における性命説の展開

第二章 白玉蟾とその出版活動——全眞教南宗に  
 おける師授意識の克服

第二篇 金代の全眞教における性命説とその諸相

第一章 牧牛圖頌の全眞教と道學への影響——圓  
 明老人『上乘修真三要』と謙定「牧牛圖

詩を中心

第二章 全眞教の性命説に見える機根の問題につ

いて——南宗との比較を中心に

### 第三章 全眞教における志・宿根・聖賢の提挈

——内丹道における身體という場をめぐる  
つて

### 第三篇 元代の全眞教における性命説とその諸相

#### 第一章 『還丹秘訣養赤子神方』と『抱一函三秘

訣』について——内丹諸流派と全眞教の  
融合の様相

#### 第二章 趙友欽・陳致虚の性命説について——い

わゆる「全眞教の墮落」をめぐる

#### 補論一 内丹とカニバリズム——食人・嬰兒・房中

術

#### 補論二 日本における全眞教南宗研究の動向につい て

## II 神道と内丹思想——吉田神道における内丹説の受

容について

### 第一章 『陳先生内丹訣』の内丹説とその傳授につ

いて

### 第二章 吉田神道における道教の影響について——

『北斗經』と内丹説の關係を中心に

資料 天理大學附屬天理圖書館 吉田文庫藏『太上  
老君說常清靜經』

このように、本書は第一部と第二部に大きく分かれ、第一部では宋金元の内丹思想と全眞教をめぐる、第二部では日本の神道と内丹思想の受容につき論じられている。ただし分量的には第一部が三篇に分けられて本書の大半を占め、こちらの方に重點があることがわかる。

そもそも「内丹」が「外丹」に對する語であること、外丹が鑛物や藥物を調合して不老長生の丹藥を作る技術なのに對し、内丹が體内の氣のコントロールや瞑想を用いた身體技法であること、外丹が唐末以降、藥物中毒者を生んだことなどにより衰退すると内丹がそれに代わって勃興し、以後、道教の主要な修養法となることなどは、すでによく知られた事柄であろう。

また、ここに「性命説」というその「性命」も内丹説

にもとづくタームで、ごく簡単にいえば「性」が精神を、「命」が身體を表わす。内丹においては精神的悟りと身體的長生がともに目指され、そのための理論として「性命説」が多様な展開を見せたのである。

第一部の序章では本書全體の視點が示される。かつて全眞教を「新道教」と呼んだ常盤大定、陳垣、窪徳忠らの研究を再考し、その研究枠組みを見直すべきことを説く。すなわち、彼らはヨーロッパにおける宗教改革を念頭に置いたり（常盤、窪）、日中戦争時の民族的抵抗を投影させたりして（陳）、これを「新」と名づけたが、そのために採り入れた内丹説や齋醮を呪術宗教もしくは「迷信」、あるいは政治権力と結びついた「墮落」と批判し、その結果、全眞教の理解に偏向が生じてしまったと指摘する。このことはまた「新道教」と「舊道教」の斷絶を必要以上に強調する危険性をはらむともいう。そこで、そのような「近代」という烙印」から離れて「資料にもとづく實證主義的な研究を進めていくこと」が必要だとする（四二頁）。

第一篇では宋代における性命説の諸相が論じられる。

ここにいう「性命説」とは前述した精神および身體の修養のことで、第一章ではまず北宋の張伯端『悟眞篇』の内丹思想を論じ、ついで張伯端以後、南宋において形成される「南宗」——北方に起こった全眞教を「北宗」と呼ぶのに對していう——の傳授系譜を再検討したうえで、薛道光と白玉蟾という代表的人物の性命説を詳論し、さらに白玉蟾以後の内丹家である周無所住および李簡易の性と命の關係が實證的にたどられる。

彼らの性命説にはさまざまなバリエーションがあつたことが示されるが、これらがいずれも「禪宗との思想的格闘」（二二六頁）の中で行われたという指摘はそのとおりであろう。特に、張伯端の性命説が禪宗の不足を補うため「頓悟漸修」を要請すること——空寂を頓悟したあとも、習漏を消すための漸次的な内丹修養が必要だとする——、また白玉蟾の内丹道が性を修めるに當つたて禪宗によらずともよいとして『悟眞篇』のいう「命から性へ」という構圖を覆す（九二頁）ことになつたという

のは、重要な論點と思われる。白玉蟾は張伯端のように命功と性功を分けず、命功の中に性功を内包させたというのである。この第一章は百ページに近い雄篇であり、讀み應えのある論述となっている。

第二章は、白玉蟾とその著作の出版について論じる。本來、丹道を他人に漏らすと天譴が降るといふ恐れから内丹道は祕訣として口傳されたのだが、天譴を懼れずにこれを世に廣め、出版するという轉換が南宋において起こったとし、翁葆光、陳楠および白玉蟾における傳授理解を検討する。内丹道の普及の仕方に關して一石を投じる考察といえよう。

第二篇では、金代すなわち全眞教勃興期の性命説が論じられる。

第一章では禪宗の牧牛圖（十牛圖）に類似する全眞教系の圓明老人『上乘修真三要』および儒學系の醜定『牧牛圖詩』を取り上げ、前者が牛ではなく馬を用いるなど、禪宗の單純な模倣ではなくそれぞれの思想的立場からの表現を持っていることを諸資料により論じつつ、牧牛圖

のモチーフが、性説の面で佛教・道教・儒教いずれにも廣く影響を及ぼしたと指摘する。

第二章では、全眞教における機根の問題を手掛かりに、王重陽やその弟子の七眞の性命説を南宗と比較しつつ論じる。すなわち、この時期の全眞教は調息法を除けば諸修養法に意義を認めず、内丹術も放擲されていたとし、性功によって清淨無爲の境地に達することによって命功もおのずと成就されると理解されていたという。こうして全眞教は上根的立場をとり、一切の手段を與えることのない峻烈さをもつが、これに對して南宗は中下根的あり方をとると總括する。

第三章では、神仙による助けを意味する「聖賢の提挈」の語がこの時期の全眞教にしばしば見出されることに着目し、それを、種々の修養法が放擲され、心の鍊磨が厳しく求められたとき、身體を修行上の據りどころにできない修行者たちの宗教的不安によるものと推測する。

第三篇では、元代の全眞教の性命説が検討される。

第一章では南宋の内丹書『養赤子神方』と元後期の全

眞教徒、金月巖編『抱一函三祕訣』を取り上げて元代の全眞教に至る内丹道の道筋の一つを明らかにする。すなわち、もともと鍾呂派の内丹書だった『養赤子神方』は、南宋末の蕭應叟らが張伯端『悟眞篇』の性命説の影響を受けることで改編が加えられ、それが金月巖に繼承されたという。他の道書も交えた論證はやや複雑であるが、全眞教と内丹道の融合といっても單純な合流ではなく、複數の内丹流派が關係していることを實證的に説明している。

第二章では、常盤大定らによって「墮落」とされた元末の趙友欽とその門人陳致虚の性命説が取り上げられる。彼らはともに全眞教の系譜に連なるとされ、儒佛一致の立場に立つ趙友欽は釋迦や達磨は實は内丹の修業を成就させていたという「奇説」を説き、陳致虚もこれ受けて、仙となり佛となるための道は「金丹の道」にほかならないという。こうして彼らは佛教・禪宗にも實は命功（内丹）が存在していると説くことになり、著者はこれを「命功への回歸」（三一四頁）と結論づけている。つまり

「墮落」ではなく、全眞教思想の一展開として彼らの内丹説をとらえたことになろう。

このほか、補論一はカニバリズムと内丹説をめぐる興味深い論考であり、補論二では日本における南宗研究史を詳細に跡づけている。

以上の第一部に續いて、第二部は日本神道と内丹思想に關する研究であり、天理大學吉田文庫藏の『太上老君說常清靜經』をめぐる考察となっている。同經には北宋の陳朴『内丹訣』と關連をもつ『修真九轉丹道圖』が附されているところから、第一章では『内丹訣』の内丹説につき分析を加え、鍾呂派や『悟眞篇』とも異なるもう一つの内丹説の形成について論じる。續く第二章では吉田神道に與えた道教の影響として『北斗經』と『修真九轉丹道圖』を詳細に検討し、吉田神道では全眞教なり内丹思想からの影響は限定的であったと結論づけている。また資料として吉田文庫藏『太上老君說常清靜經』の校訂テキストを多數の關連諸本を用いて作成しており有益である。

以上、ざっと内容を紹介したが、この素描だけからも本書がすぐれた知見を含むことがわかるであろう。宋金元という中國近世期における道教史を叙述するのは容易なことではないが、「性」と「命」をめぐる言説に焦點を當ててその特色を考察した功績は大きいと思われる。北宋の張伯端に始まり南宋の白玉蟾らへと發展する内丹道（南宗）と、少し遅れて金代の王重陽に始まり七眞へと受け繼がれる全眞教（北宗）という、別々に生まれた二つの大きな道教の流れが、南北を再統一した元代においてどのように展開し、また交錯・融合していくのか——そうした道教史の様相の重要な領域を明らかにしていると思われるのである。禪宗や道學（朱子學）など他の思潮を視野に入れているのも本書の裾野の廣さを物語っている。

新資料の發掘も多く、『抱一函三祕訣』、『太上老君說常清靜經』、醜定「牧牛圖詩」などの検討にそれを見ることができる。

このほか感心するのは、本書の用意周到さである。先

行研究を丹念にたどり、それをふまえたうえで着實な分析を行っているため論旨に説得力がある。漢文資料の引用に現代語譯をつけていることも行き届いた配慮である。これに關連して、第一部補論二に附せられた「全眞教南宗研究文獻目錄略」、卷末に載せられた「全眞教師承系譜圖略」と「宋・金・元における全眞教および關連人物生卒表」、および「書誌」はツールとしても有用であり、特に「書誌」は關連先行文獻に關する網羅的なビブリオグラフィーとなっている。卷末に附される索引もきわめて詳細で、本書の價値を一段と高めているといえよう。

\*

このように本書は従來の研究レベルを一段と引き上げた勞作と思われるが、いくらか氣になった點を三つ述べたい。

一つ目は『悟眞篇』の内丹說理解についてである。著者は『悟眞篇』の内丹說の特色をしばしば「頓悟漸修」の語で要約しておられるが（一三五頁、二四一頁、三三三

頁など)、著者も解説しておられるように、それは本来、『悟真篇』が佛教(禪宗、性功)に對して、頓悟後でも時間をかけて内丹を鍊成し習漏・煩惱を除かなければならない(命功)と戒めたものであつて(六〇頁以下)、一種の便法に屬すると思われる。この場合、性と命の關係は「先性後命」になるが、内丹道としての『悟真篇』の基本的立場は「先命後性」(五五頁など)のはずだからこれとは逆である。「頓悟漸修」を強調するのは全眞教の「頓悟頓修」(三四八頁)との違いを際立たせるためかもしれないが、内丹説に關してやや誤解を招く説明のように思われる。

二つ目は早期全眞教と内丹との關係である。確かに王重陽や七眞は内丹術に批判的であり清淨な無漏の境地を第一義に目指したが、「全眞教の文獻をひもとくと、そこは數多くの内丹の術語で満ちている」(二三七頁)と述べられるように、内丹をまったく無視したのではないように見受けられる。丘處機や馬丹陽らが清淨無爲の境地に達すれば九年間で「丹田」が結ばれると語ったり、

内丹用語である「龍虎交媾」の語を用いたりしてるところを見ると(二一五頁以下)、早期全眞教にとつても内丹は單なる比喩以上の意味を持っていたのではあるまいか。またもし、單に清淨無爲の境地を目指すだけならば、禪宗との違いが判らなくなるであろう。こうしたことからすると、「全眞教では内丹術を有爲法であるとして放棄した」(二四二頁)とまで言えるかどうかは検討の餘地があるかもしれない。張伯端に先立つて成立していた鍾呂派との關係も含め、早期全眞教における内丹の位置づけについては、いっそう考察を進めていただければと思う次第である。

三つ目は、全眞教そのものの研究についてである。序章において著者は全眞教研究の視點の見直しにつき述べられたが、本書はもっぱら内丹思想に焦點が當てられ、全眞教の思想全般や宗教教團としての考察、評價にまでは及んでおられない。これはもちろん望蜀というものがあるが、今後、こうした方面についても我々を裨益していただきたい。

さて、評者が『悟眞篇』に關する拙論を書いたのはもう三十數年も前のことで、當時は内丹思想に關する研究は微々たるもので心細いかぎりであつたが、本書を閲讀して研究が「ここまでできたか」という感を深くした。評者はこの分野については日本・中國・歐米などの研究成果を十分トレースしておらず、誤讀している點もあるかもしれないが、ともあれ最新の重厚な研究により勉強の機會を與えられたことに感謝申し上げたい。

(A5版 五三七頁、二〇一九年二月 汲古書院、

一三〇〇〇圓(税別)

### 執筆者紹介

砂山 稔 岩手大學名譽教授

王 博涵 筑波大學人文社會科學研究科歴

史・人類學專攻一貫制博士

森 由利亞 早稻田大學文學學術院教授

横手 裕 東京大學教授

松本 浩一 筑波大學名譽教授

吾妻 重二 關西大學文學部教授

朝山 明彦 北海道大學文學院博士後期課程

二ノ宮 聰 北陸大學國際コミュニケーション

學部講師

酒井 規史 慶應義塾大學商學部准教授